

『日本教』の吟味

宇佐神 正 明

はじめに

日本人の精神構造を的確に表現する言葉として、イザヤ・ベンダサンが『日本人とユダヤ人』（山本書店、一九七〇年）において初めて使用した「日本教」という言葉に優る適切な言葉は見いださし難いであろう。実際、彼は、そこで、「これは世界で最も強固な宗教である。というのは、信徒自身すら自覚しえぬまでに浸透しきっているからである。」（九〇頁）とその理由を述べ、さらに、「日本教の基本理念は『人間』である。従って神学は存在せず人間学が存在する」（一〇四頁）と説明しているのである。さらに、彼は、一九七二年には『日本教について』を著わし、その概念をより明確に規定している。また、それと同時に、彼は、戦国時代末期に仏教徒、キリシタン、儒家として生きたハビヤンを『日本教徒』において、日本教徒の典型として取り挙げ、究明するのである。

この一貫した日本人に対する肉薄は、日本人が、物事を自覚的に処理するのではなく、環境特に人間関係において「止むを得ざるところ」に従って、すなわち自然に従って処理するタイプの存在であることを明らかにしている。こ

の事態が、日本教徒をして、自分がその教徒であることすら自覚し得ないものとし、その様に自覚し得ないまでの日本教の浸透を支えているのである。この態度を、相良享は『誠実と日本人』（ペリかん社、一九八〇年）の中で、日本的な誠実として展開している。日本人には、知性があるけれど、主体性がないのである。否、「止むを得ざるころに従う」という主体的決断を下し、それを受容しない人間を異端として徹底的に排除してしまうか、傍観者の立場に立とうとするのである。この止むを得ない事態が彼らの行為を免責し、責任を追求する態度を、大人げのない、卑劣な児童に類する態度として処断してしまうのである。この生活態度の全体的な確立への要請にこそ、日本教への回心があり、日本教の宗教性の実体と特性が潜んでいる。それは、自分の置かれた立場のもたらす必然性に従って生きることに、すなわち「自分に死ぬこと」に人生の意義を見いだすものであった。それは、信条以前の態度であるが、全面的な回心を要請する、一つの明確な宗教なのであり、すべての宗教に共通な全体的な要求を持っているのである。この自然に従うことへの決断の要請の宗教的妥当性が、私たちの日本教の吟味の中心的な課題となるであろう。

問題は、人間における精神発達の中で、青年期の特性としての自己同一性の確立とそれに対応する徳としての誠実とを、自律と自発性の放棄という形でしか表明し、実現し得なかった状況にあると言えよう。この事態を、それを惹起した歴史的状況と人間の発達の角度から以下において検討を加えることとしたい。

それに先だって、先ず、イザヤ・ベンダサンの「日本教」に対する見解を検討し、日本人の特性にどこまで迫り、またその由来を説明し得るかを検討し、如何なるチャレンジが、日本に生きる現代のキリスト者に対してなされているかを確認したい。

一 イザヤ・ベンダサンにおける「日本教」とその由来

では、イザヤ・ベンダサンは日本教の世界をどの様に提示したのであるか？ ます第一に、かれは、「恥を知る」者の間に出現した人間関係におけるバランスの世界であるとす。それは、自己の意地に、換言するならば、恥を知る武士としての意地に殉じ、その決断に殉じる世界なのである。

それは、武士を取り巻くどの様な状況によって惹起され出現したのであるか？ 先ず、武士の置かれていた背景の検討から始めることとしたい。ハビアン（一五六五年頃～一六二二年頃）が生きた時代に武士の置かれた立場は、大名領国制の進展と共に、直接的な生産者から切り離され、論功行賞として与えられた土地と人民を支配するものであった。それは、農民と連帯して生きる名田の主であった名主としての地位を喪失し、大名に仕える以外に糧道を断たれた寄生的存在となり、いわば中間領主としてのあり方を喪失していた。この様にして、武士は十二世紀に遡る「武家イエ」の進展とともに、主君との人間関係を懸けてのみ生存の根拠を見いだし得る存在となり、「人間」という基本理念に殉ずる以外に生存し得ない存在となっていた。とはいえ、武士と農民とは身分的には固定されず、貴賤の別なく相互に移動し得る状況にはあった。従って、この時代の武士における恥の性格は自発的に選び取られたものとして、まさに日本教の原型であったと言えよう。それに対して、太閤の刀狩りと徳川時代の身分制度の確立を通して、階級間の身分移動が不可能となった時代において日本人全体に及んだ恥の性格とは、必然的に異なるものがあったであろう。ここに、恥を気概として生きる人々と他との比較において恥を感じて生きる人々とのあり方が明確に別れ、それ以後の日本社会のシステムを可能とすることになる。

第二に、イザヤ・ベンダサンは、日本教の世界は「二人称の世界」であるとし、踏絵を取り上げる。踏絵の本質

は、その差し出した人または団体と彼が二人称の関係に入るか否かの検証にあった。そして、キリシタンに対する踏絵は、彼らをキリストとの二人称の関係から引き裂き、踏み絵を強要した人間と二人称の関係に入ることを強要し、それによって生存を保証したことにあった。

ところで、二人称の世界は、人間の成長段階に即して言えば、母親との間がすべてであり得る、幼児の世界と対応する精神構造の発達段階に比せられ得よう。幼児は、母親と二人称の関係にあるため、母親の提供するものを無条件に受容することおいてのみ安全であり、成長が約束される。従って、二人称の世界は、実に、幼児に取っては服従としての正義の働くべき正常な世界である。それは、子供の独立と成長のために有効に機能する。しかし、君臣間にもこの様な関係が展開し、擬制的な親子関係が武家イエにおいては出現するに至ったのであった。

従って、生活の基盤を自らの生産活動の中に持たないで、君臣間の恩愛関係のみに依拠せざるを得ない武士の立場は、必然的に心理的な強制として働き、幼児における正常な二人称の世界の心情を、君臣関係という疑似親子関係に転移し、固着を決定的にした。

悲劇は、この様な武家イエ的な心情が、豊臣家、徳川家存続を意図する天下人の自己愛の犠牲となって、日本人全体を巻き込んで行ったことにあった。とはいえ、幕藩体制の下でそのことが生起し得た背景は、日本人の精神的な状況がその様な発達段階にまで成長していたことの消極的な傍証とはなろう。

では、この母子固着的な関係と武家イエの出現には内的な関連性を見ることが出来るであろうか？ 私には、この二人称の関係が日本に固着した背景に、日本の家庭のあり方、特に武家イエにおける女性の特異なあり方が、人間的成熟を不可能としたことが、深く関係していると思われる。

私たちは、二人称の世界が自然発生的な母子関係にその強固な心情的基盤を有していることは認め得よう。生産階級にあっては、生産活動の担い手は夫婦であり、夫婦を中心とした家庭である。ところが、公家を中心とした古代日本やウヅ社会も、それに続く、武家イエ社会も最終的には生産階級とは乖離した存在となってしまった。この事態が、ウヅ社会における妻問婚のもつ、何時夫が来なくなるか分からない妻の立場の不安定性と結合して、母子関係優位の二人称の関係を定着させ、母子固着を決定的ならしめたと思われる。そこにおいては、女性は自己の政所を持ち、妻問婚のため親子関係の中心となり、女性の地位は極めて高かった。そこに、夫婦を単位とした家庭の形成への方向性が存在し得たかは疑わしい。また他面、二人称的な母子関係の心情が、初期武家の出陣の作法や一揆における「一味同心」的な結束を生み出し、男社会をも促したことであろう。また母親としての心情が武家イエの存続を念願し、自然的情愛優先のイエ社会を生み出し、維持させる上で機能したことであろう。

この様に、武家イエ社会の出現は、総領と母との間に特異な母子固着を生み出し、父親の排除と男系子孫の必要性から嫁入り婚を促進したことであろう。この様にして、「女は弱し、されど母は強し」という形で、妻の地位は低下を始め、ついには、白無垢の死人としての装束をまもって嫁入りするに至ったのであった。結婚は、総領制の下でイエ存続の手段と考えられ、人間としての自然の情愛を基礎とする母子関係優位の下に、成熟した男女の愛における協同としての、夫婦を単位とした家庭の形成は、武家イエにおいては不可能となった。また、家庭相互の交流を基盤にした共同社会に対する感覚も徐々に奪われ、母親の心情において総領との母子固着のため、男性中心の単身者本位主義が当然の風潮となり、母親は子供の栄達と立身出世をのみ願望するにいたり、徳川時代における参勤交代や、今日における単身赴任容認に対する女性側の条件が整備されて行ったと思われる。

それに対して、民衆においては、家庭は健康であり、社会形成は漸進し、惣村的構成の中、自治が進展を見たので

あった。この様に、十六、十七世紀には民衆の自治と自由の進展は、武家イエ社会の進展を阻止するまでに成長していた。その時、織豊政権は天下を統一し、徳川幕府はイエ制度は法制化し、強制的な施行を通して初めて、武家イエを制度的に再構成し、今日に至る日本社会のシステムを樹立し、強権的に維持して、今日に至っている。従って、日本的集団主義やイエ制度とそれとの関連における企業のある方は、日本的な伝統としては評価しえない。その様な立場は、完全に民衆の立場を無視した、天下人の保身に加担する見解であると言わねばならない。従って、民衆の立場における社会の形成を考える立場からは、徳川以降の民衆の置かれた窮状とそのすべての歪んだ結果を糾弾し、克服することが追求されなければならないであろう。

第三に、イザヤ・ベンダサンは、日本教は、天秤の世界であり、天秤の分銅に対応する空体語の世界とのバランスに生きる宗教の世界であると言う。天秤の一方には特定の「二人称」の関係にある人間集団が載り、他方には分銅に対応する空体語としての神々が載っている。ここに宗教としての日本教は、現実となる。この天秤の世界の維持の観点からしてのみ、織田信長の叡山焼討ち、一向一揆の弾圧、さらには徳川幕府のキリシタン禁教や鎖国等が必要だったのである。その天秤には、武家イエのみが載るべきであり、それ以外の人間の発言は封じられねばならなかった。ここに天下人たちの、宗教戦争のあの非情性が可能となった。この世界では、言葉は本来の機能を果たすことを期待されることなく、かえって有害と考えられた。それは、二人称の世界を突き崩し、対等な人間よりなる共同関係の形成を促す危険なものであったろう。天秤の上に乗って絶妙なバランスを保持している世界は、このバランスを崩すことによって崩壊する。このバランスを崩すことは、武家イエ全体の崩壊を結果するはずである。この様にして日本は「言挙げせぬ国」と言われ、「出る杭は打たれる」必要のある国となった。それと共に「言霊の生きる国」であり続け、ことごと水面下の根回しを必要とするに至ったのであった。

実に、神々（空体語）の世界は、それに対応して天秤のもう一方の皿に規定された「二人称」の世界によって維持される。そのため、既にそこを支配している、言霊の支配に服する「思いやりと察し」が要求される。それは、天秤上の限られた交わりの世界として、実質的には、祖先祭祀を共有する関係に分断された世界として、構成されると共に、世俗社会の位階制に対応して、神々も序列化されたのであった。

この武家イエ社会においては、個々人の主體的な判断は、わがままとして許されず、無視され、排除される。従って、人間の成長は、より上位の新しい「二人称」の関係に、すなわち、より上位の天秤の世界の一員になると言う形態において見いだされる。人間は、その体制を評価して初めて、その中で立身出世し、家名を挙げ、恥を注ぐことが許容される。そこで、人間は面目を施し、成功者となる。ここに、タテ社会が確定し、生活者としての民衆の世界は崩壊し、民衆自身が、その体制内での延命策を主体的に、実は屈辱的に追求し始めるのである。この段階に到達して、日本教は、神聖な宗教として、全日本的な振りをもって自己を確立し、完成するに至った。この様にして、日本教の世界は、天秤の位置（地の利）と同じ皿の上の人間関係（人の和）を自己生存の最低条件とする、防衛団体であると共に経営団体でもある武家イエ（今日では企業）をモデルとして出現し、今日に至るまで存続しているのである。

では、この社会に生きる人間の守るべき信条は何であろうか？ イザヤ・ベンダサンは、日本教の教義を三条にまとめている。第一条は「人間は支点であって、言葉ではない」である。そして、第二条は「人間の価値はこの支点の位置によって決まる」であり、第三条は「神は空名であるが、名があるからその理がある、従ってその応もない」というてはならない」である。これら教義は、それぞれ、日本教の人間観、社会観、宗教観に対応し、今日に至るまで、上述の如く、日本社会を理解する上でもっとも適切な範型となっている。

以上の吟味を通して、イザヤ・ベンダサンの言う「日本教」の世界が、一つの完結した、天井に吊り下げられた、

無限に下方に開けたモビールの世界であることが確認された。それは、個々の成員の全ての人間的成果をもって、すなわち忠孝の道徳をもって、そのバランスを死守し、戦闘・経営集団である「イエ社会」「タテ社会」に従属する人々を徹底的に体制への献身に向けて無化し、現在化する世界である。ここにおいて、人間の成功は、上位の天秤の世界の一員となるか、自分より下に、自分に下属する天秤の世界を付け加える（事業を起こす）かにある。このモビールの世界として「日本教」を認識するとき、今日までの卓越した「日本人論」、「日本社会論」を見渡す立場が与えられよう。また、この宗教性が、日本人の主体性を蝕み、自律的・自発的行動を異質的なものとして否認して生きる、排他的な生活態度の根拠ともなっていた。実に、日本教の世界は、人間としての生活を形成する生活者としての立場に立つ者に対しては、徹底的に敵対感情を持つ世界である。しかし、実に、明確な一つの実践的で主体的な戦闘・企業集団への信仰告白の世界として存立している。そして、この点を深く反省するなら、私たちは、日本教キリスト派の信者と言われてもおかしくはない人々を、集団主義的な反応をし、人間関係を気にする（土居建郎の甘えの世界に浸っている）多くのキリスト者を私たちの周りにも見いだし得るであろう。

しかし、日本教は、生活そのものを犠牲にして可能となった一つの世界であった。そして、その犠牲とその継続が今日の状況下でなお許容され得るか否かを確認することは、日本に生きる私たちの急務であろう。その意味において、以下にその由来の一端を纏めて例示することによって、それからの脱出への問題点をより明確にしたいと思う。

以上の考察は、日本教の世界が、大名領国制下の十六世紀の武家イエにおいては現実となりつつも、生活の基盤を確保しつつ自主自律の道を歩みつつあった、十六世紀の庶民の生活においては成立基盤をほとんど有していないことを明らかにしている。実に、それを可能としたものこそ、日本教による諸宗教の徹底的な弾圧であった。それは、一向一揆の弾圧、叡山焼討ちに始まり、キリシタン禁制、寺請け制度に至る、一連の宗教弾圧によって可能となった。

また、刀狩り、大閤検地、大名の禄高制度、土農工商穢多非人という階級制度の導入・実現と、その背景としての時代錯誤的イエ社会実現のための法の整備と忠孝道徳の強制、それに対する違反者に対する弾圧と見せしめによって可能となった。また、城下町を作り、農村その他、藩内に散在していた職人たちを城下町に集め、職業毎に棲み分けさせることによって、それまでの人間関係を破壊することによって可能となった。そのために、鎖国や関所の設定を通じて国民から生活と移動の自由を奪い、他方、妻子を人質とする参勤交代の制度等によって、徳川家の安泰を計った。この様な日本社会の現実には、人々を自己の生存のためには止むを得ないものには逆らうべきでないことを教え、長いものには巻かれることを自らに許容し、今は生き延びるしかないとの心情に追いやったことであろう。その様な心情が、長く続いた体制のもとに確信に変更したところに日本教が国民的に一般化した原因があるであろう。これらのことは、人間の成熟や今日の日本人の置かれた状況からどの様に評価されなければならないであろうか？

二 人間の倫理的成熟の見取図と日本教の世界

人間は、自由な交わりにおいて段階的に出現する人間関係の拡がりに対応し、精神的に成長する。その精神的成長の可能的根拠の研究が、私の中心的な研究課題の一つでもあった。倫理的世界は、人間の主体における主導的な意識が、自然的制約性の比重の大きい「習俗」への服従の段階から、習俗を異にする人々が平和裡に共存するため共通の法の下で生活する、「法」社会の段階を経て、法の精神を共有する「理念」的社会を構成し、遂には人格的愛の共同体を主体的に担う「実存的な交わり」の段階へと成熟したとき始めて可能となる。それは、人間の正義感が服従としての正義から平等としての正義へ、さらに公正さとしての正義へと展開するとする、J・ピアジェの研究結果と対応

している。しかし、すべてに対応し得る大人としては、このいずれに対しても適切に対応し得る主体的自由の段階に立たねばならない。ここに、実存的交わりの世界が開け、倫理的世界は成立を見るに至るのである。

この様な大人への成熟は、人間的な交わりの展開の必然的な結果なのであるか？ 日本教の検討の手段として、私たちは、人間の倫理的成熟を可能とする主体的能力を検討しつつ、日本教への逸脱とその呪縛からの解放の可能性を検討してみたい。先ず第一に、人間的な交わりの基底としての知性と感性と愛の連関について、使徒パウロの祈りを導きとして検討する。人間は知性と感性との相互補完的な関係を通して主体的な意識を展開しつつ社会的存在として成長する。この相互補完的統合の主体が愛であり、人間の関心の実質である。そして、それが交わりの展開と共に増大しつつ交わりを支え可能とする。従って、この両者の働きが有効に機能するためには、それを担う主体としての人間における両者の機能の豊かな展開の保障がなければならない。その主体的な担い手として、今日、大脳生理学その他の研究を通して学問的にも明らかにしつつある、男性と女性の家庭や社会における分業の意義が究明され、評価されなければならないのである。第二に、人間は、経験を積むことを通して知恵を蓄積して行く。この経験に対する評価が社会のあり方と人間のあり方を規定することになる。この経験の概念と人間の生長について、A・ゲレーンを参考に日本教が吟味検討されねばならないであろう。第三として、人間が愛において経験を積みつつ自我を形成して行くことは、幼児期から成人期に至る注意深い教育の賜物であり、その可能な根拠は、人間個々人が生得的に備わっている発達段階を交わりの展開に応じてクリアし、それを支える主体的能力としての徳のスケジュールに従って徳を体得し得るか否かに掛かっている。この問題に関しては、E・H・エリクソンを参考に検討を加えることにしたい。とはいえ、本稿においては、問題の提起にとどめ、真の究明と解決は他日を期することとしたい。

知性と感性の相互補完的關係と愛

人間の主体的な成熟は、主体に即して与えられている能力の検討から始めなければならないであろう。それは、人間における知性と感性である。これを媒介にして、人間は外界と認識的に、また感覚的に関わり、外界を自己の内的世界に取り込むことが可能となる。使徒パウロは、「ピリピ人への手紙」第一章九節から一一節で「あなたがたの愛が、深い知識とするごい感覚においていよいよ増し加わり、それによって何が重要であるかを判別することができ、キリスト・イエスの日に備えて、……」と祈っている。

パウロの祈りは、ピリピの人々のために捧げられている。ここでは、「あなたがた」と呼びかけられ得る一つの人間関係にある人間集団の成熟が問題となっている。そこに於ける人間の成熟は、集団において、そしてその集団を構成する個人において、主体的な関心として愛が増し加わることにあると彼は言う。パウロにとっては孤立した人間は問題とはならない。その集団における愛の増大の結果、その都度の人間関係の全体に対する適切な判断力が与えられ、集団としても個人としてもその成員を生かし、キリストの日に備えることが出来るに至るのである。キリストの日はキリストの体である教会が完全な交わりにおいて出現する終末の日のことである。この愛の増大が鍵となっており、その共同体は、「純真で責められるところのないもの」となり、「イエス・キリストによる義の実に満たされ」るに至ると言う。此処で中心的な役割を担っている愛は、あなたがたの愛と言われ得る形で共有され、個々の主体的な成員の発達に応じて担われる人間関係の拡がり全体に対する主体的能力であり、その範囲にまで及ぶ共同体形成の主体的能力なのである。その共同体とは、パウロが種を蒔いた、キリストの体としての教会である。それは、愛の共同体として成長して行く。

このパウロの祈りを導く言葉は、「深い知識とするどい感覚において」という言葉である。この両者は、個々人の内面において相互補完的に機能して、主体的関心を確実なものとし、人間の成長を確保する。それと共に、人間に共通な基本的な経験の世界を構成している。パウロにおいては、愛は、深い知識とするどい感覚において増し加わる、主体的交わりを支えるものである。実に、それは、人間と神とイエス・キリストに対する知識が深まり、感覚が鋭くなって行くことと相互補完的な関係にある。それは統合的主体としての人格に宿るものである。それは、カルバンが、『キリスト教綱要』の冒頭において、神認識と人間認識とが相即すると述べ、主体的能力としての人格に言及しているのと軌を一にしていると言えよう。

知識の深まりと感覚の鋭敏さとは、常に、生活発達の先端において、新しい問題と対決し、それを解決して自己の経験の世界に統合して行く前提となっている。そして、人間の生活を開拓し展開させる上で決定的に機能している。この生活の先端とは人間関係における新しい出会いのことである。それは、新しい人間を受容し、新しい関係を形成する側にとっても、新たに教会に参加する側にとっても真実である。しかし、これは単に教会共同体に妥当する事柄であるだけでなく、すべての成長しつつある人間関係にも妥当し、日本における人間関係の形成との関係においても追求されなければならないことは言うまでもない。このことは、実に、人間が交わりにおける生活経験（知識と感覚の統合）を通して成熟することを明らかにしているのである。

日本において人間の発達を阻害するもの

実に、人間の愛は交わりにおいて知識を深め感覚を豊かにすることによって成長する。従って自由な交わりの保障のないところに、人間の知性と感性の開拓はなく、知識の深まりも感覚の豊かさも有り得ない。また、人間関係の成長発展は期待されるべくもない。しかし、今日、日本においては、交わりのために自分の時間を自由に行使し得るひとは少ない。実際、職業は、なんらかの企業に従業員または経営者として参加することにおいて可能となり、生活は保障される。ところで、日本では、就職は自由の喪失を意味し、自分の知識と感覚の放棄を意味している。そして、また休日単なる疲労回復のための日であり、交わりと社会形成のための日としては共通理解に到達していない。生活の保障と職場から解放された共通の時間なくしては、自由な交わりなど社会的には問題となり得ない。この両者の両立は、企業の自己抑制において初めて可能となる。それが国際的な課題として認識されたところに、ILO条約として週休条約と年次有給休暇条約が成立したのである。しかし、日本はこれら条約を最初からの参加国であるにも拘らず、今日なお、批准していない。また日本社会の現実には、その条約を批准し得る状況からはほど遠い。実際、それらの条件の充足はただちに日本教の死を意味し、日本産業界の崩壊を意味するであろう。

この現実には、日本の生活実態に関連して、また人間の成熟に関して考慮すべき問題を提起している。事実、これら週休日と年次有給休暇とは、工業化社会から家庭生活と社会生活を守る最低条件として国際的に承認され、要請されている事柄である。それは、人類の一員として日本と日本人が歩むべきなら、最低条件でもあるはずである。それは、また、人格的に開かれた交わりの実質的保障として、その社会に住むものに一斉に周期的に継続して八週休日 \surd が与えられることの重要性を明らかにしている。また、八年次有給休暇 \surd は社会の最小の構成単位である家庭の一年毎の再生を保障するものである。事実、この両者の不在が、日本社会をいつまでも経営・防衛集団に終始せしめ、緊張とバランスにおける多層モビールたらしめ、絶えざる調整に精力を使い果たしてしまうのである。他方、生活を楽しむ人間を徹底的に排除し、日本教の温床としての役割を果たしているのである。

実に、知識と感覚への真実な対応が、習俗内生活（家庭生活）にいのちを吹き込み、法のもとに相互に尊敬しつ

つ社会生活を送り、理念と精神を共有する信仰共同体を可能とする。そして、成熟した人々に、人格的な愛の共同を実現させるのである。ここに、西ドイツが宗教教育を憲法で義務づけるほど重要視している理由が理解し得るのである。

人間は経験的に成長する

この様に、パウロの祈りは、人間が主体に即した知識と感覚に対する真実において経験を積み、愛において成長することを示している。A・ゲールンは、『人間学の探求』所収の「経験の本質について」の中で、経験の本格的な意義と働きとを追求している。彼は、決済と活用性という経験の二つの側面を取り上げ、特に両者の関連における経験の蓄積を評価している。決済とは問題を片づけることを意味し、活用性とは突然の出来事に対応する能力を意味している。そして、この決済と活用性との関連において経験は蓄積される。それは硬直化傾向、勤、体系的断念において現れ、性格を形成し、確立する。

しかし、日本教の世界では、その体制維持に結び付く特定の経験のみが評価される。従って、人間社会全体の富としてあらゆる経験が相互に関係して一つの全人類的な伝統へ統合され、蓄積され行く、生きた経験は評価されない。また、あらゆる面で経験に対して何ら支持的な措置が構じられることもない。否、むしろ、そのような余地は、制度的に排除される傾向にある。ここでは、職業関係が実社会として決定的なウエイトを占め、既存の天皇を最高位に位置づける多層天秤の世界が学歴・職歴等を通して位置づけられ、すべての人間は天秤の系列の中に位置を占める。そこで生存を許されるのはこの天秤の全体的秩序とバランスを崩さない人間だけである。それ以外のものは予め何らかの形で排除され阻止され、窓際に追いやられなければならないのである。そこに、日本教の排他性と徹底性があ

る。人間的成長とは、一つの天秤からもう一つの上位の天秤へとモビール上を摩擦を生じないで平和裡に移行しつつ、社会的に上昇することである。従って、人格者とは上位の天秤にその座を占めるに至った者のことである。それは既に置かれている二人称の関係から上位の新しい二人称の関係への移行を意味し、N・ペラーが『日本近代化と宗教倫理』において叙述している、政治価値優先の社会を生み出している。ここでは、人間としての経験よりも、社会的スタート地点と努力が問われる。この様な社会では、個々人の経験が交わりの主体である人格的な経験として評価され、全人類的な交わりの中に統合され、社会的伝統として展開し、次の世代に生きた人間関係として伝達されることはない。従って、日本社会では、教育に至るまで、すべてが行政によって方向づけられ、官憲がほとんど全能の力を有してバランス維持に励むことになる。この様な事態は、明らかに徳川幕府のもとで方向づけられたものであって、人間固有のものでもなければ、まして日本人固有のものでもない。

人間の発達と日本人の無性格性

この様に、知性と感性とは、相互に補完的に機能して愛を結晶し、愛の増大が、経験的主体としての人格を成長させる。これは基本的には、発達段階に依りて出現する両面感情の主體的克服であり、E・H・エリクソンとの関連において捉えられよう。E・H・エリクソンは、『幼児期と社会』の第七章「人間の八つの発達段階」において、人間の精神的な発達に関する漸成的発達モデルを展開し、一連の両面感情の出現とそのもたらす危機の克服による成熟を取り扱っている。実に、人間の心理・社会的な発達には両面感情の出現とそのもたらす危機の克服による成熟となる。彼は、フロイトの発達段階Ⅷ口唇感覚期、Ⅱ筋肉肛門期、Ⅲ移動性器期、Ⅳ潜在期、Ⅴ思春期と青年期、Ⅵ若い成年期、Ⅶ成年期、Ⅷ円熟期Ⅴを援用し、それに対応する危機感情として、基本的信頼対不信、自律対恥と疑

惑、自発性対罪悪感、勤勉対劣等感、同一性対役割混乱、親密さ対孤独、生殖性対停滞、自我の統合対絶望を、段階的に克服されるべきものとして挙げていく。また、この段階的克服を通して獲得されて行く人間の力としての徳（発酵力）のスケジュールを、彼は『洞察と責任』所収の「人間の力と世代の循環」において展開している。幼児期の徳としては、希望、意志力、意図、有能感を、青年期の徳としては、真実を、成人期の徳としては、愛、配慮、知恵を段階的に発現するものとして挙げていく。この様にして、自我の統合が為され、つぎの世代に伝達すべき経験の総体としての知恵が確実になるとき、世代の循環が可能となり、伝統的社会が展開される基盤を確立する。

では、人間精神の内面的な成長は、年齢的にはどの様に位置づけられるであろうか？ それは、必然的にその社会の教育制度に反映し、その取り組みに活かされるであろう。そのことに対する豊かな示唆を、赤星進は『精神医療と福音』において与えている。それは、また、日本人の人間の成長段階における問題点の所在を見いだす視点を提供している。彼は、「生後八ヶ月頃までは自我未形成期（基本的信頼関係の時期）、生後八ヶ月から満六歳までが自我形成期、六歳から十二歳までが自我拡張期、十二歳から二五歳までが自我修正期、二五歳から死ぬまでが自我成熟期」としている。

先ず問題となるのは、自我形成に関わる両面感情のもたらす危機を相応しく克服しえたかである。すなわち、基本的信頼、自律、自発性の感情が、不信、恥または疑惑、罪悪感に打ち克って、自我を形成するに至ったかである。これに対応して、希望、意志力、目的意識に於ける自我の主体的能力としての徳が展開される。この様に形成された自我が、交わりの主体として、性格形成と人格的決断の主体となるのである。しかし、この自我が社会的な役割を分担し得るためには、それぞれの得意とする領域を開拓し、劣等感に打ち克って積極的に参加し得るよう、それぞれの個性を確立していなければならない。また、社会的な協力と参加を通して、平和的な社会の主体的な形成者となるためには、その置かれた人間関係を通して、正義感を段階的に体得し、服従としての正義から平等としての正義を経て、公正さとしての正義感が体得されていなければならない。このことを通して、有能感が体現され、積極的に物事に関わりつつ、社会の主体的な形成者となり得る基礎が確立される。これが、赤星の言う自我拡張期で、おおよそ六歳から十二歳の時期に当たり、この段階での経験の蓄積の結果、性格が形成される。それに続く、自我修正期はほぼ十二歳から二五歳の間である。その段階で、人間は、それまでに形成され、自我拡張を通して個性にまで展開された、性格としての自己と対決し、それを修正しつつ性格を主宰し、人格として自己を完成して行く。青年は、その時期に、自己に対して真実に生き、疾風怒濤の時代を通して、自己に納得の行く交友関係とイデオロギーとを形成する。このことにより、主体的な自己を確立し、自己同一性を確保するに至り、人格を完成するに至る。それに続く、成人期において、男性・女性としての人格的あり方を確立した者が、愛において家庭を形成し、自らの子と社会に対する配慮において、歴史的社会的創造的な形成者となり、担い手となる。このような生活経験を通して得た知恵が、次の世代に対して伝達され、社会的な伝統の内実をなし、世代の循環を通して、伝統的な社会が形成され、一つの人類的な伝統の形成が可能となるに至る。

このことは、多層天秤における位置から要求される役割を受動的に受けとめて果たすだけで可能であろうか？ また、感性と知性とを積極的に断罪し、煩惱（愛）を断つことを、積極的・主体的に引き受ける、日本教的な主体性において可能であろうか？ 実に、日本教は、肛門期に恥の意識が不信と共に固着し、自律の感情を喪失した者が、青年期に主体性を確立し得ないまま、体制内存在となってしまうケースと、幼児期に自我を形成し得ても、イエ社会的な秩序への参加に際して、あえて自己を主体的に放棄し、イエ秩序のバランスへの献身において決断的に入信した者からなる世界として、存立している。ここでは、家庭生活に対する献身は、脆弱さとして軽蔑の対象となる。

実に、エリクソンの自我の発達の八段階は、人間の自我が、信頼と希望と愛において、平和と自由を求めつつ、死に至るまで、その各々の時期にそれぞれの役割を果たしつつ、漸成的に成熟して行くことを明らかにしている。今日、日本は、国際化の流れの中で、また情報化社会と、高齢化社会の到来という、未曾有の経験の下で、共に協力しながら、平和に生き、主体的判断を下し得る、人格の完成を目指した教育を行なうべき時代の要請のただ中にある。また、「イエ社会」的な多層天秤のバランスの世界から主体的に脱出して、人格的な自由と創意に対して開かれた交わりを通して、無限に成長を続けるいのちの世界に身を置き、人類と経験を共にし、協同すべき段階に到達している。これらの国民的な要請は、ますます強く共通な国民的悲願となって来ている。このことは、今日の日本の教育に対して、私たちが如何なる発言をなすべきかを明らかにしているのである。

三 日本教の克服

以上の考察は、日本人の精神構造と、その肛門期における恥意識の固着を明らかにした。そして、今日、日本人が、多様な対応をこの日本教に対してなしつつあるのが現状である。一つには、不当に加えられた人間性に対する抑圧の故に、自律的な行動と自発的な人間関係の形成に対応する準備を自我形成期になし得なかったため、多数の無性格者が出現していることである。彼らは、大多数の中小企業の従業員に見られる生き方となって、日本人のあり方を規定している。二つには、成人した後、それこそ止むを得ず日本教に主体的に身を投じ、ホンネとタテマを区別しつつ、主体的に体制に身を委ね、実質的なその支持者となってしまっている、いわゆるエリートに属する人々である。その他第三の部類に属する人々も日本には見いだされる。その特徴は、企業からの離脱であり、自営業者や農民

であり、自由業者である。しかし、彼らとて、週休制の確立していない社会においては社会生活の主体とはなり得ない。この様にして、今日、日本社会には主体的な構成員は存在し得ないため、この多層モビルとしての日本の世界は、一見安泰に見えよう。しかし、これは、単純増殖を繰り返す癌細胞と同様に、日本と人類を蝕みつつ、全人類の崩壊をもたらす危険性を内蔵している。このことの重大性を自覚して、日本と人類を救うものは、日本におけるエリート層の決断と指導力ではなからうか。そして、彼らが立ち上がらない場合、なお残された望みがキリストの教会にあると言えないであろうか？

四 福音と日本教

以上の分析は、キリストの教会とその福音に、極めて大きなチャンスが到来しつつあること、また、それを生かす得ないならば、人類に多大な不幸が訪れる日の近いことを告げている。実に、防衛・経営団体である「イエ社会」、二人称の世界へと追い詰められた集団的虚構の世界から人間を解放し、真実な人格的交わりの世界に身を置かせつつ、人間不信の扉を打ち砕き得るものはイエス・キリストの福音以外に存在し得ないであろう。また、旧約から新約に至る歴史は、いのちの木に象徴されている人間生長の歴史であり、人間の幼児期から成人期に至る成熟の歴史でもある。そこには、成熟過程における両面感情等の問題解決に対する多くの示唆がちりばめられている。福音は、神への信頼において、人間を恥の世界から解放して、もう一度、真の自由に生きる自発性の世界へと解き放つであろう。日本人は、敢えて「筋肉肛門期」へと退き、三歳児の世界に主体的に身を投じ、善悪を知る木から遠ざかって、今日なお恥の文化の中に留まっている。「移動性器期」における善悪の知識は、罪悪感に打ち負かされることなく、自発

性と結合するとき、豊かな性格の確立と、思春期における自己同一性の確立の前提となる。そこで、自我修正に立ち向かいつつ、今日の無性格性と自己の思想を持たない人格的な虚無性とを克服して、人格を完成せしめ、性格を確立させるであろう。そして、完成された人格相互の交わりにおける協同を通じて、愛の共同体、キリストの体としての教会にいのちを与えることであろう。日本の進路は、今日、この方向しか残されていないことを知るべき時にきていると言えよう。

実に、人間の生活は、孤立しては不可能である。安政の開国は、このことの証拠である。そして、日本教の世界は、明治の開国以降、世界的孤立と世界化との間を揺れ動いて今日まで命脈を保ってきた。すなわち、国際化と国粹化との揺れによるバランスの保持によって、日本教の大廈は支えられ、倒壊を免れて今日に至っている。この揺れの存在が可能な限り、それは倒壊を免れよう。しかし、この重層天秤におけるバランスの世界が、今日、国際化、情報化、高齢化の前に、決定的な揺さぶりを受けており、瓦解の危機に瀕している。いかにしてこの瓦解を免れ、一つの全人類のいのちに組み込まれ行くことが可能であろうか？ それは日本に住む人々の主体的な協力と参加による以外にはないであろう。またその主体的な参加と協力にまで一人ひとりが生長する以外にその可能性はないと言えよう。この様にして、バランスの世界のもたらすぬるま湯を抜け出し、人間として社会として生長するいのちと激動の道が残されている。それは人間が家庭を作り、家庭の連帯として社会を形成する道である。それは織豊政権以来奪われてきたものを、国民に返し、国民に交わりと相互理解の時間と場を保障する事によって可能となろう。そのとき、日本の精神的鎖国は終わり、真の開国が到来するであろう。それは、そう遠い将来ではないであろう。

事実、明治の開国後の歴史は、国際化と国粹化とを二十年周期で繰り返し、バランスを保ってきた。それによって日本という大廈は倒壊を免れてきた。そこにおいては、国民の生活は捨象され、国家的なナショナリズムだけが存在していた。そして、今日このナショナリズムは最後の決定的な挑戦を受けている。週休二日制と年次有給休暇に関する対応が、今日ほど切実な問題となっている時代を、私たちは日本の歴史において見いだし得ないであろう。それと共に、逆コースも最後の力を振り絞りつつ反撃に出ているのである。

以上の事柄は、私たちが人間関係における交わりの主体であることを忘れ、為政者と共により外面的な豊かさを追求して、自己の生活の実質的な豊かさにほとんど関心を払わないで、今日に至ったことにつけである。従って、私たちは、人格関係の外にある物事に関する知識・技能に関しては、極めて優秀であるが、人格として交わりの主体であることに於て極めて貧弱であった。この課題の解決の為に私たちに求められているのは、先ず、「日本教」の実体と、その歴史、また現在の教育におけるその再生産の形態等を注意深く観察することではない。その知識の上で、企業が社会生活や家庭生活を尊重し、社会的責任を果たすものとなるように、週休日や年次有給休暇等に関する労働条件を国際基準以上に達成するよう行政に働きかけ、政府の監督責任等を明確にすることであろう。それと共に、国民の為の政治の実現に対して教会が見張りの役を主体的に引き受け、預言者的な発言を行うことではなければならない。この様にして、真に信頼に満ちた日本の社会と文化を形成する道が見いだされるであろう。事実、国民の主体的能力の発現は、最後の秒読みの段階に到達していると言えよう。

ところで、キリストの教会が、日本の社会に対して正しい対応をなし得るためには、先ず自己の中に浸透しているイエス社会的な体質と対決し、その様な体質を教会政治から駆逐し、人間として積極的に行為するものへと成熟し、教会を形成し、日本社会を建て上げなければならないであろう。事実、教会自体が、日本教の虜となっており、日本教キリスト派に過ぎないとするイザヤ・ベンダサン指摘には傾聴し、自己反省と自己改革に資すべき真理性が多分に含まれていると思われる。そして、この自己改革は、教育問題とか家庭問題に対する責任ある対応と平行して実現さ

れるであろう。その時、教会は、国民と連帯して、家庭と社会に責任を負い得る存在となることであろう。「光のあ
る内に光の中を歩」み、目的を目指して歩み通すものになりたいものである。その時、教会は、旧新約聖書が人間成
長の歴史であり、教会教育の中に、E・H・エリクソンの「人間発達の八つの段階」が現実のものとなり、徳のスケ
ジュールがそれを導くことを知るに至るであろう。

なお、本稿においては、言及しなかったが、E・フロムが『悪について』の中で展開している「生長の症候群」の
追求が人間共同体の自己改革の導きとなることであろう。そこにおいて、彼は、生長する社会に生きる人間の生活の
構えに言及して、いのちあるものへの愛の構え、隣人・異邦人・自然に対する愛の構え、自由―独立を尊重する構え
を挙げている。今日、教会並びに日本社会が精神的な交わりにおいて生長を意図し、それを主体的な課題として引き
受けて、全人類的な交わりの中に自己を見いだしたいと願うなら、それらの構えは、真の自己改革と自己実現を導く
ものとして、決定的に機能し、豊かな交わりの形成と平和に貢献するに至ることであろう。

参考文献

- 赤星 進『精神医療と福音』（聖文舎、一九七七年）
 イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』（山本書店、一九七〇年）
 イザヤ・ベンダサン『日本教について』（文芸春秋、一九七二年）
 E・H・エリクソン『洞察と責任』（誠信書房、一九七一年）
 E・H・エリクソン『自我同一性』（誠信書房、一九七三年）
 E・H・エリクソン『幼児期と社会』上・下（みすず書房、一九七七年）
 金子武蔵『倫理学概論』（岩波書店、一九五七年）
 きだみのる『にっぽん部落』（岩波新書、一九六七年）

- 公文俊平、佐藤誠三郎、村上泰亮『文明としてのイエス社会』（中央公論社、一九七九年）
 A・ゲールン『人間学の探求』（紀伊国屋書店、一九七〇年）
 相良 享『誠実と日本人』（ペリかん社、一九八〇年）
 土居健郎『甘えの構造』（引文堂、一九七一年）
 J・ピアジェ『臨床児童心理学IV児童の道徳判断の発達』（東京同文書院、一九六五年）
 E・フロム『悪について』（紀伊国屋書店、一九六五年）
 N・ペラー『日本近代化と宗教倫理』（未来社、一九六二年）

（日本基督教改革派・善通寺教会長老、四国学院大学文学部教授）